

調査日 群馬県森林組合共販所 8月3日

今回の市は暑さで中だるみ、買い気も消沈。開札結果発表も無し

8月に入って猛烈な暑さが続く中、今回は38℃を超える日となり、恐らく共販物件を展示してある土場では、直射日光を遮るものが無い上アスファルトの照り返しの中で、軽く40℃を超える環境であったろう。この環境下では、ゆっくりと物件を見定める余裕など無く、先ずは明細書で目ぼしい物を見定めて、そのまま無難な単価で入札してすぐに帰る。或いはピンポイントで物件を見て、すぐに建物に戻り、やはり無難な単価で入札、すぐに帰る。と言った買い方が多く、開札終了後には誰も残っていないので、札の読み上げは無しになった。

私は入札結果のコピーを貰い、前回の市の様子や買い方の動向など共販所で把握している範囲で情報収集を行う。

入札結果は4.0m中目材に空白の無入札物件が目立つ中で、目ぼしい物は同じのようで、応札の有った物には、複数枚の札が入っている。

KSKと表記されているのは”葛生小径木加工協同組合”でトーセン製材のグループ会社で、ホームセンター出荷用。

その他、太い丸太を一手に買って他社と競合していない佐々木と言う買い方は、素生協の市でも名前を見かけるが、情報不足。札の入れ方は、暑さのせいもあろうかと思われるが、”流し”と呼ばれる均一価格で買い叩く様な値は付けないが、投網を打つような手法

調査日 素材生産協同組合 8月8日 (納涼市)

木材業界に限らぬらしいが、2 8(ニッパチ)と呼ばれる時期がある。2月と8月は物が売れなくなる季節だと言う事だ。かつて原木市場でもこの法則が、当てはまっていた。

しかし国内の木材需要が国産木材へ移行すると、それまで外国産の木材に軸足を置いていた大手の需要会社が、新しい流れを作りこの傾向は薄れていた。”薄れていた”と過去形なのは、今またこの傾向が見られる様になっている。

大口の需要会社は、独自の流通ルートを構築し、従来の原木市場はかつての傾向が現れているのかもしれない。

とは言っても、大手の需要の影響は大きく、二つの市場で共通して荷動きが鈍い中で、特に4.0mの中目材の不振が目立つ。これは「合板メーカーが生産調整をして、2.0m材の受け入れを絞っている。」と言う情報が入ってきた。このため2.0m材を生産できず特に需要傾向も見られない4.0m材のまま出荷するしかなくなった。その結果として、4.0m中目材が、だぶついてしまっている、と言う構図らしい。

